

## 本書の主旨と目標——まえがきに代えて

東アジア文化圏が、西欧との対比において自らを意識し、それを「アジア」として括るに至るのは、おおよそ一九世紀後半以降のこととみてよいだろう。そしてそれは、ほかのさまざまな領域とならんで、東洋の美と思想をめぐり突出した思索表現をみせる。本研究では、その歴史の実相に迫るとともに、その理論的射程を現在の時点にたつて問い直す。こうした問題意識を育んだ両大戦間の世界市民意識は、第二次世界大戦後の国際意識、さらには一九八〇年代のオリエンタリズム Orientalism 論争、ポスト・モダンニズム Post-Modernism を経由し、二一世紀初頭のグローバル化 Globalization へと変貌を遂げて、現時点に至っている。「東洋意識」は（アフリカや南米とともに）これから将来、人類の文明の将来にとっていかなる位置を占め、いかなる貢献を求められているのか。おおよそ日本でいえば日清戦争期から、第二次世界大戦後の日本の再独立までの時期に限定し、しかし視野を日本列島には限定することなく、この課題に応えようとするのが、本書の目論見である。

本書の背景をなす共同研究では、このような問いに検討を加えるため、狭義の美術史や美学、思想史に限定することなく、文学、宗教、政治など隣接領域からの参画も得て学際的な接近を試み、また韓国・中国のみならず、イスラーム圏を含め、アジア意識の帰趨を国際的な視野のもとに考察することを目標に掲げた。また第一次世界大戦を経た時期の欧米では、西欧の行き詰まりを打開するための方策を東洋に求める一群の思想家たちも登場する。かれらの思索の可能性を再検討するためには、西洋思想史をはじめとする分野の専門家の参加も得て、世界

文化・文明史における「東洋」の命運と将来への課題につき、総合的な見通しを与えることが、求められることとなる。

一九三〇年代に模索された東洋の美と思想をめぐる思索は、当時なお圧倒的な優位を誇っていた西欧側からの期待に応答する性格を宿していた。西欧内部での知的な需要に応じるかぎり、東方からの供給は歓迎された。

だが期待に反する異質性は受け入れを拒絶された。東洋に期待される異質性とは、西欧の許容範囲という均質性の限界を超えない限りでしか有効でない。その許容限界を超えた異質性は、無効・有害なものとして排除された。いわゆる東西の知的対話は、この需要・供給関係に抵触しない範囲に自己限定されている。この枠組みをいかにして脱却できるのか。現在の「文明間対話」の停滞に鑑みれば、この課題には重大な知的挑戦が秘められている。

このような研究目的を設定すると、そこで具体的に検討すべき対象としては、人名に限っても、まず近代東洋にあって、東洋人であることを自問した数多くの知識人が念頭にのぼってくる。思いつくままに列挙するだけでも、その第一世代としては、辜鴻銘、岡倉覚三、ロビンドロナート・タゴールなどの名が脳裏を過ぎる。次の世代には、狭義の美学・美術思想に限定しても、日本では、野口米次郎、谷崎潤一郎、鈴木大拙、柳宗悦、和辻哲郎、金原省吾、橋本関雪、矢代幸雄、鼓常良、保田與重郎、大川周明をはじめとする多くの著述家・思想家が挙げられよう。かれらと交流のあった韓国や中国の文人や画家、さらにはファッション、ヴァレリー、ヘッセ、ロン、パンヴィッツ、シュヴァイツァー、ハイデガー、レーヴィット、タウト、フロムなど「東洋」を強く意識しつつ思索し創作した西洋の知識人も、枚挙に暇がない。中国の文人としては呉昌碩、羅振玉、錢瘦鉄などが著名だが、それ以外にも、胡適、周作人、林語堂など「西洋」との関係で考察すべき作家や学者は多い。韓国では高裕燮、朴鐘鴻にはじまる系譜、あるいは崔南善から徐寅植への展開、インドではアナンド・クーマラスワミ、カリダス・ナグー、ステラ・クラムリツシユほか、さらにイスラーム圏関係では、アフガーニーやムハマド・ア

ブドフフ、ラシッド・リダーらに代表されるイスラーム改革運動のみならず、フランスのアンリ・マシニョンから日本の井筒俊彦に至るまでの振幅を含んで「東洋」の軌跡が辿られよう。

だがともすれば、これらの固有名詞は、中国、朝鮮、インド、イスラーム圏といったそれぞれの地域、あるいは政治思想、哲学、美学といったそれぞれの専門領域の縦割りの枠組みゆえに、たがいに結び付けて議論される機会に乏しかった。それぞれの専門領域ではよく知られた人物でも、ひとたびその専門家共同体の枠を越えようと、その事績はほとんど知られていない。こうした従来の学術には付き物の弊害を乗り越えるため、共同研究会という場を設定し、縦割りの壁を越えた知的対話・学術的情報交換を目指した。「東洋意識」という括りによって、複数の地域や学術領域で潜在しながらこれまで没交渉だった問題を共有し、互いに他を照らしだしつつ、自らも映しだされるという、相映・相発の場を設けようとするのが、本共同研究の目論見であった。

その成果の一斑としてここに刊行する本論文集は、しかしながら、もとより、こうした人名だけでも多岐にわたる領域をすべて鳥瞰できるものではない。寄稿者には、あとう限り一次資料に基づき、従来不当に低い評価を得てきた、知られざる思索家を再検討する方向で、執筆をお願いした。人物と系譜を軸とするだけでなく、時代特有の問題系を浮上させて再検討する努力、論争を復元し、争点を再検討する探索、また特定のキーチームの命運を見極め、現時点から振り返って批判的整理を施すことも不可欠だろう。その設計図については、続く導入部「共同研究の構想と概要」で詳説したい。

限られた紙幅と執筆者だけでは、この広大な課題のすべてを尽くすには程遠い。だが、個々の事例は、「東洋」を軸とした思索の可能性と陥穽とを見定め、とともに従来の西側世界による学術方法論、理論志向の限界や欠点を露呈させた思索の射程を解明しようとする。「東洋」と呼ばれる——あるいは時代遅れとなりつつある——観念を抛り所として展開された思索が孕む錯索を再吟味する一助となるように配慮した。たとえ一隅なりとも照

らすことで問題の所在に見当をつけ、今後より幅広い領域の研究者との協働への糸口となるならば、本書の意図の一端は達せられる。

平成二三(二〇一一)年二月八日記

稲賀 繁美

註

- (一) なお、共同研究会とあわせて開催した国際シンポジウムでの発表論文は、別途非売品の英文論文集として刊行するた  
め、本書には収録されていない。ここで触れた幾つかの問題意識や関連する人物については、併せてこの英文報告書、  
*Questioning the Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empires*, International  
Research Center for Japanese Studies (2010), 2011を参照したことをたご。